

プロティノスの『ティマイオス』解釈：魂論におけるTim.35aの位置

著者名(日)	植田 かおり
雑誌名	神田外語大学紀要
巻	20
ページ	131-156
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001239/

プロティノスの『ティマイオス』解釈 —魂論における *Tim.35a* の位置—

植田かおり

序

プロティノスの思想が、知性界と感性界というプラトンの二世界説的な基本的枠組みを基盤としつつも、アリストテレス、ストア派などを始めとした複数の源泉から重要な概念や説明図式を得ていることは、すでに同時代において指摘されていることである¹。他方で、一者、知性、魂という三つの原理の説や、最高原理からの発出による世界創造の説といった、独自の哲学説の完成者としての側面は、彼を「新」プラトン主義者と呼ぶことに積極的な根拠を与えと言えるだろう²。

しかし、そのように一見混交主義的であり、しかし際だって独自の思想を表明しているにもかかわらず、プロティノス自身は自らをプラトン主義者と考えていたのは確かである。これについては多様な証拠が挙げられるが³、とりわけ重要と思われるのは、プロティノスは、彼の思想の基本原理である「三つの原理」に関して、自分はプラトンに対して新しい思想的立場にはなく、自分が語っているのはプラトンの解説であると述べていることである⁴。プロティノスのプラトン主義者としての自覚は、プラトンという、(プロティノスの考えによれば) 真実を明らかに語ったほとんど唯一の哲学者の思想を解説するという、自らの哲学的営みの意義の理解に基づいていると言えるであろう。

我々は既に、プロティノスの魂論を様々に検討してきた⁵。上記のプロティノスの自己理解の上に立つとき、魂論はどのような議論として現れてくるのであろうか。言い換えれば、プロティノスは「魂」についてはどのようにプラトンを「解釈」したのか、という問いが我々の問いである。そして、この大きな問いに取り組むための予備的な調査と分析が、本論考の目的である。

この目的のために、プロティノスによるプラトン解釈として、プラトンのテキストへの明示的な言及の場面を概括的な仕方で見ることにする。ただ、プロティノスが引用・言及するプラトンのテキストには、『パイドン』、『パイドロス』、『ティマイオス』など様々であるが、魂論においては『ティマイオス』への言及箇所が特に重要であると考え⁶。この立場から、まず、第1節では、『ティマイオス』言及箇所と、その文脈を概観し、『エネアデス』にとつての『ティマイオス』への言及の傾向性を検討する。次に、第2節では、『ティマイオス』35aに基づき、魂をめぐってなされるIV 2 (4)での議論の重要性を見込んで、この箇所における魂の本質規定の性格を明らかにしたい。その上で、『ティマイオス』⁷ 35aへの他の言及箇所を比較検討し、魂論におけるIV 2 (4)の位置づけを明らかにしたいと思う。

第1節 プロティノスにおける『ティマイオス』引用箇所の全体的傾向性——魂論への示唆

*editio minor*⁸のIndex Fontiumに依れば、*Tim.*はプラトンの著作中、最も多くプロティノスが言及している著作である。プロティノスがこれらの箇所に触れる仕方や文脈は多様であるが、ここでは特に言及の回数が集中している箇所に注目してみたい。それらは、プロティノスの思想においてプラトン由来のライトモチーフの源となっていることが考えられるからである。*editio minor*に従って言及回数が五回以上の箇所を機械的に挙げると、31b (11回)、

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.*35a の位置—

35a (13回)、36e (7回)、37c (5回)、37d (12回)、39e (10回)、41d (7回)、42e (5回)、50c (5回)、52b (8回) である (ちなみに『プロティノス全集』は「とりわけ頻繁に言及される箇所」として 35a, 36e, 37d, 39e を挙げている⁹⁾)。これらのうち、言及の文脈に共通性を有する箇所に重点を置きながら、以下に概観していくことにする。なお、本稿においては、プロティノスの『ティマイオス』への言及全体の傾向性を観ることが目的であるので、各箇所の細かな分析ではなく、各々の言及を文脈ごとにおおまかに分類していくことにしたい。

①知性および知性界に関する文脈

以下に見る *Tim.* への言及箇所は、感性界の存在根拠としての知性について語るものである。以下、それらの箇所を大きく二つに分けて見ていくことにする。

(i) 「完全無欠の生きもの」としての知性界

以下は、*Tim.*31b 「完全無欠の生きもの τὸ παντελὲς ζῶον」及び、39e 「まさに生きものであるところのもの (ὅ ἐστι ζῶον)」に基づいて、知性界の説明がなされている主な箇所である¹⁰⁾。これらの箇所では、*Tim.* における「範型 (παράδειγμα, 28a-b, 30c-31d, etc.)」の完全性が、知性または知性界の完全性として語られている。

V9 (5), 9, 5-8 「この宇宙がそれによってあるところのものは知性に由来するのであるから、まさに知性の中にこそ全ての原型 (ἀρχέτυπον) が存在することが、そしてまたこの知性は知性界 (κόσμος νοητός) であることが必然である。これ (直知界) をプラトンは「真に生きものであるもの」と呼んでいる。

VI 2 (43), 21, 57-58 「知性は自己自身のうちにあるものどもを含み持つ完全無欠な生きものであり、まさに生きものであるところのものである」。

VI 7 (38), 8, 31 「それ（知性界）はまた完全無欠の生きものであって、単に人間だけを自己の内に含むものではなかった。なぜなら、そうだとしたらこの世界には人間だけしか存在しなかつただろうから」。

VI 7 (38), 12, 1-3 「我々の主張するところでは、この世界はかのをいわば範型として存在しているのだから、かの所においてこそ、もっと先にその全体が一つの生き物でなければならぬ。そして、かの生きものの『有ること (τὸ εἶναι)』が完全無欠であるとすれば、かの生きものはあらゆるものでなくてはならない」。

以上から、「完全無欠の生きもの」としての「知性」の規定性は、あらゆる生きものを包括する一個の生き物 (*Tim.*33b) である感性界に対する範型として、生命の根源としての役割をもつものになっていると見ることができるが、以下に見るように、知性はまた、宇宙制作者 (*δημιουργός*) でもあるという解釈が述べられている。

次のテキストで、プロティノスは、知性を三種類に分け、さらに場合によっては宇宙制作者を魂と見なすグノーシス派の見解が *Tim.* への誤った理解に基づいていることを指摘している。すなわち、

II 9 (33), 6, 17-19 「プラトンは、『知性はまさに生きものであるものの中に内在するイデアを見て、ちょうどそれだけの形相をこの世界もまた所有すべきであると計画した』と言っているのだが、彼ら（グノーシス派の人々）はその意味を理解せずに、第一に静かに自己のうちに全ての有るものを持つ知性と、第二にこれとは異なるもので（直知対象を）見る知性と、第三に計画する知性があると解釈した。とはいっても彼らは多くの場合、「計画する知性」の代わりに「創造する魂」をおいている。そしてこれこそプラトンによれば、世界創造者であると彼らは信じているのだが、実際には彼らは創造者が何で

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.35a* の位置—

あるかの認識から遠く隔たっているのである」。

Ⅲ 9 (13), 1, 1-3. 14 「プラトンは『知性はまさに生きものであるところのものの中にアイデアが含まれているのを見る。また、万有の制作者は、この万有も、知性がまさに生きものであるところのものの中に見るものを持つべきであると考えた』と述べている。するとプラトンは、知性以前に諸形相があって、知性はすでに存在しているそれらの形相を直知する、ということを行っているのであろうか。・・いや、直知するものとしての知性と直知されるものとしての真なる生き物が異なっているとしても、両者はただ異なっているというだけで、互いに離れているわけではないのである。それに、一方は直知するもので、他方は直知されるものであるという、ただそれだけの違いであれば、思惟の上では区別されても、実際には両者は一つであると言っても何ら支障はないのである」。

これらのテキストにおいて、プロティノスはデミウルゴスと範型の両者その役割によって文字通りに区別する立場を否定し、両者が実際には一つの知性であると見なし、創世神話における両者の区別は直知の働きと直知対象の区別を表しているとして解釈している。*Tim.* における創造行為のこのような解釈によって、知性の存在論的な根拠性が一層明白にされていると見ることが出来るであろう¹¹。

(ii) 制作者の「とどまり」の解釈

Ⅳ 8 (6), 6, 10 において *Tim.42e* の「神はこれら全てを手配してしまうと、もう早速自分の性にあった、常の生活に戻ってしまい、そのままとどまっていた¹²」という神話的な語り方に解釈内容として対応しているのは、「上位のものは常に自分に固有な地位にとどまっているのであるが、その上位のものに秘められた言い表しがたい力によって、下位のものがいわ

ば産出される¹³⁾」というテキストである。このテキストにおいて重要と思われるのは、*Tim.*の「神」の制作活動と休息ないし「とどまり」はアオリスト分詞の構文に明らかなおり、時系列の前後関係の中で語られていたが、プロティノスにおいては上位のものにとどまりと同時的に起こる下位のものゝ発生が常に (ὁμί) 同時に起こることとして、さらにまた、上下関係 (τοῦ μὲν προτέρου - τοῦ δὲ μετ' αὐτὸ) で語られているということである。このように、上位のものがとどまりながら、下位のものゝ発出していくという垂直方向の関係性は、以下の箇所にもみられるように、知性のあり方に限られることなく、より一般的な関係性としても語られている。

V 2 (11), 2, 2 「始源から末端のものにいたるまで、進出するその仕方は、それぞれが常に自己固有の座に残り、生み出されたものは一段劣る別の地位を得るといふ仕方なのである」。

V 3 (49), 12, 34 「もし何かがかのもの (一者) のあとに成り立ったとすれば、かのもゝが依然として同じエートスのうちに留まることによって、それが成り立ったのである」。

V 4 (7), 2, 21 「かのもゝが自己の内に留まっていた何かが生まれるのであれば、このものは、かのもゝが最高度に、まさにそれであるところのものであるときに、かのもゝから生まれるのである。だから、『かのもゝは自己の固有の習性の内に留まっていた』、生まれるものはかのもゝから生まれ、しかもかのもゝが留まっているままで生まれるのである」。

V 4 (7), 2, 33-4 「かの所でも同じである。いや、あそこでこそ、先ずそうなのであって、かのもゝ (一者) は自己固有の習性の内に留まっていた、かのもゝから生まれ出た働きの『有ること』と『有』とになったのである」。

これらの箇所にも共通する特徴として、IV 8 (6), 6 の解釈において最も明示的

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.*35a の位置—

であったように、*Tim.* において時系列の中で描かれる「手配」から「常の生活」へのいわば水平的移行は、プロティノスにおいては上位・下位の垂直的な位階差として語られるのである。つまり、彼は「上位・下位」という概念図式によって、*Tim.* の中に二元論的世界観の根拠を見出していると考えられるのである。

②魂に関する文脈

(i) 魂の本性について

*Tim.*35a の「彼は、分割不可能で常に同一の状態である有（ἡ ἀμέριστος καὶ ἀεὶ κατὰ ταῦτὰ οὐσία）と、物体の間に生ずる分割可能な有（ἡ περὶ τὰ σώματα γιγνομένη μεριστὴ οὐσία）の中間に、その両者から第三の種類の有（τρίτον οὐσίας εἶδος）を混ぜ合わせて作った」に基づいて、プロティノスは IV 2 (4) において、分割可能性を分類基準として四つの本性を区別し、その中に魂を位置づけている。ただし、この位置づけは、四つの本性相互の関係性を語ることにもなっており、ことに魂の本性に関しては、魂の起源であり、魂に先立つものである知性との関係と、魂が知性から発して向かっていく感性界との関係という、知性と感性界の両者との間で運動する動的な本性を語るになっている。このテキストについては次節でより詳しく見ていくことにする。

(ii) 魂の序列について

*Tim.*41d において、デミウルゴスが再び混酒器で魂の素材を混ぜる際に「純度において二段も三段も劣るものだった」と述べられる箇所については、IV 3 (27), 6, 27, VI 4 (28), 4, 3-4 においては宇宙靈魂と個靈の違いを語る典拠としての役割を担うと共に、IV 8 (6), 4, 35-6 では個靈が感性界の生成へと向か

うことの契機を語る箇所と解されている。他方で、より一般的に、「全てのものが第一位のものではなくて、第二位や第三位であるものは全て、自分より前のものに比べて劣る本性を持っている」(Ⅲ 3 (48), 4, 46) という言及もあり、Ⅳ 3 (27), 6, 27 では、個々の人間の魂の現実の活動の優劣の違いを語る際のモチーフにもなっているが、全体に共通しているのは上方に知性(または一者)をおき、下方へ向かって価値が劣るといふ、上下の序列化が成立していることである。それは例えば次の箇所のようにである。「第二位、第三位の魂は、(知性界に) 近いか遠いかを基準にして言われていると考えねばならないのであって、例えば、我々の魂の場合でも、あの知性界に対する関係はどの魂にとっても全て同じというわけではなく、ある人々は実際にそれと一体となることが出来るのに対して、別の人々はそれとの一体化を欲してその近くに達することが出来るが、他の人々はその目的を達することはほとんど不可能に近い・・・全ての人々は全ての力を持っているけれどもそれぞれが同じ力で活動するのではなくて、ある人々は第一の力で活動し、ある人々は第二位の力で、また第三位の力で活動するからである」(Ⅳ 3 (27), 6, 27-34)。

(iii) 魂の宇宙(または物体)への備わり方と支配の仕方について

Tim.36e2-3「魂はその中心から宇宙の端にいたるまで織り込まれ(διαπλακείσα)、そのまわり全体を外側から覆い(ἔξωθεν περικαλύψασα)、自ら自分の内部で回転しながら、休みなき、思慮ある活動の生(ἔμφρων βίος)を、時間のある限り続けるべく、神々しい出発点を踏み出したのである」への言及箇所の一つ、Ⅰ 1 (53), 3, 19 では、魂が物体に備わる仕方が問われ、その答えの選択肢の一つとして、「織り込まれ」ているという理解が挙げられている。続く第4章では、プロティノスは、「織り込まれ」ることが「織り込まれたものと同じ影響を受けるものにする」という意味で言われているのではない、と解釈している。また、Ⅴ 1 (10), 10, 21 では「外側から魂を覆い被せた」という言

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.*35a の位置—

葉を、魂が「あらゆる場所の外 (ἐξω τόπου παντός)」にあること、「魂がひとりだけであるときには、物体の類から何も被らず、それ自体であるものとなり、外に超越しているもの (τὸ ἐξω) となり、素材のないものとなる」(19-21) ことと関連づけ、この *Tim.* の言葉が「魂の一部が知性界にとどまっていること」を意味していると解説している。さしあたりこれらの箇所においては¹⁴、魂が(宇宙の魂にせよ、個人の魂にせよ)物体に備わる場合にも、物体と渾然一体となるのではなく、物体を超えた、独自のあり方を堅持するとされていることに着目したい。すなわち、*Tim.* においては「織り込まれる」や「外から覆う」という言葉によって語られていた宇宙論的な規模での心身関係を、プロティノスは垂直的に体系化しているのである。

③感性界に関する文脈—似姿としての価値づけ

*Tim.*37c 「生まれたものが生きて動いていて永遠なる神々の神像 (ἄγαλμα) となっているのを見て、その生みの父は喜んだ。そして上機嫌で、もっとよく似たものに仕上げようと考えた」という記述を受けて、プロティノスは、「この世界は直知される神々のすばらしい神像である」(II 9 (33), 8, 15-16、cf. III 2 (47), 14, 26) と述べる。これらの箇所では、感性界が、知性界に似ていることによって高い評価を受けるのであり、似姿自体が価値づけられているのであるが、別の文脈では、かかる似姿を通じてむしろその原型のすばらしさを語ることになっている。すなわち、宇宙を見て制作者が喜んだ、という言葉でプラトンが表現しようとしていたのは、宇宙の手本である知性界の美が嘆賞すべきものだ、ということなのである (cf. V 8 (31), 8, 8-9)。似姿は、原型に似ていると言える限りで価値があるが、原型ではないという意味では没価値的である。「原型—似姿」という優劣の関係において、感性界は両義性を持つものとして価値づけられるのである。

④素材に関する文脈

素材に関する文脈で先ず明らかなことは、*Tim.*における「場 (χώρα)」を、プロティノスは「素材 (ύλη)」と解していることである。すなわち、「素材は場であり、座 (έδρα) である」(Ⅲ 6 (26), 13, 19. cf. Ⅲ 6 (26), 18, 38.) という理解であり、これに沿って、更にプロティノスは、「素材は形相の台座 (ύπόβαθρα) であり座である」(Ⅵ 3 (44), 4, 3. cf. *Tim.*52b) と述べている。この基本的な理解の立場から、プロティノスは以下のテキストで、*Tim.*52c で語られる「私生児的な思考」(52c) とは、有るもののうちのいずれでもないもの、完全な「欠如 (στέρησις)」である素材を対象とするいわば反・思考のことと解している。

「無限定なものは無限定なものによって知られるであろう。・・・無限定なものへのまなざしは無限定である。・・・素材への直観であろうと欲する働きは、直観ではなくて、いわば無直観 (άνοία) であるとすれば、素材についての表象像はむしろ私生児的であって、嫡出子的ではないであろう。プラトンが『私生児的な思考によって』把握されるものであると言ったのも、おそらくこの点に注目したのでであろう」(Ⅱ 4 (12), 10, 11., cf. Ⅱ 4 (12), 12, 34)。

直観が形相的・限定的対象の直観であるならば、無限定なものである素材を把握しようとするその「把握」とは「無直観 άνοία」に他ならないのである。

このような素材の無限定性と、この無限定性に伴う不可知性に加え、プロティノスはさらに、素材の「非受動性」をも「場所」という表現の中に読みとっている。次のテキストで、プロティノスは、「場所」の表現が受動性を表すものではなく、素材と形相の別の関係を表現するための言葉であると前置きした後で、このように述べている。

「素材の本性と言われているものは、有るもののいずれでもなく、有るものの持つ『有 (ούσία)』から完全に逃れているのであって、それとは全く異なっているのだからなければならない・・・ある種の形相を自分の中に取り入れ、そ

れと一緒にするのであれば、素材は別のものとなって、形相とは異なるものであることをやめ、あらゆるものの場であることをやめて、いかなるものの受容者でもないことになるであろう。しかし、そのようなことにはならないで、有るものがたえず素材の中に入り込んだり、抜け出たりすることが出来るためには、入り込んだり抜け出たりするものがあっても、素材は何の影響も受けずに同一のものとしてとどまっているのでなければならない」(Ⅲ 6 (26), 13, 21-32)。

この箇所では「場所」を何かが入り出すという空間的なイメージによる表現が、素材が形相から「何の影響も受けずにとどまる」ことを表す表現として解されている。従って、素材はあらゆる形相と縁のない「形のない影 (εἶδωλον ἄμορφον)」(cf. 7, 28)なのである。以下のテキストに見るように、この、「形を持たない」という素材の性質は、プロティノスにおいては、他者を拒むことの出来ない無力さとしても考えられていると思われる。このような素材の無力さ故に、ある種の形相が¹⁵「そこからでたり入ったり」するように見えるのである。そして、それを出入りするものとしての形相もまた、力の弱いものである。「中に入ってきたり、そこから出ていったりするものは有るものの模像 (τῶν ὄντων μιμήματα cf. *Tim.50c*) であり、形のない影 (=素材) の中に入り込んだ影、すなわち、素材の形のなさ故に見られるものとなっている影であって¹⁶、その影は、素材に作用を及ぼしているように見えるが、実際には何の作用も及ぼしてはいないのである。なぜなら、素材の中に入ってくる影は無力で弱く、抵抗する力を持ってはいないからである。素材の方も抵抗する力を持っていないのだから、影は素材を切断することなく通るのであって・・・空虚と呼ばれているものの中にいわば形姿を送り込むのに似ているのである」(Ⅲ 6 (26), 7, 28-33)。

ここで、素材の中に入ってくる形、すなわち物体内の形相は、真実在の模像である一方で、「影」というそれ自体弱々しく力の無いものという意味を付与

されることになっている。それは、上位のものを真似るという活動が極限まで低下した、力を持たない末端の形相なのである。

以上のテキストにおいて、*Tim.* は素材の無限定性、および非受動性を読みとる典拠となっているとともに、その素材が受け取る形相の力の弱さと存在論的な低さをも語ることになっていることが明らかであった。このことから、素材を語る文脈においても、*Tim.* の階層的解釈が行われていると言えるであろう。素材はある限定された意味では形相を受け取りつつも、実際には形相とは全く影響関係を持たないのであり、ここに、素材と形相の間の存在論的な断絶がある。そしてこの、素材の中へやってくるように見える形相もまた、真実在の弱々しい映像にすぎず、形相の位階秩序の末端に位置づけられることになっているのである。

我々は、プロティノスによる *Tim.* への言及を見てきたが、以下のようにまとめられると思われる。まず、これらの言及は知性論から素材論まで多岐に渡るテーマにおいてなされているという点を指摘できよう。そのことは *Tim.* の内容がそれに相応しい思想的体系性を兼ね備えていると考えられていたことを示すものであると言ってよいことになる。しかし、このことは、第2に、*Tim.* が創造論であることとも関係している。世界を創るという場面では、創る者と創られる者とが区別され、そこに存在論的な地位が与えられることになり、それは位階秩序を表すことにもなる。*Tim.* への言及の根底には、プロティノスの解釈上の独自の視点が明らかにみとれるのである。それは、知性から素材まで行き渡っている階層的理解のスタイルなのである。

第2節 IV 2 (4)「魂の本質について (第一編)」の基本的視点とその理論的汎用性

1) IV 2 (4)における魂の本質規定

IV 2 (4)「魂の本質について」は、先行するIV 7 (2)の議論の結論を受けた論文であるが、その冒頭をプロティノスは、「以前の議論 (= IV 7 (2)) とは別の仕方」、「より先の議論に進む」という告知で始めている。これらの言葉は、IV 7 (2)においては魂の本性をめぐる論述が主に『パイドン』および『パイドロス』に依拠してなされ、IV 2 (4)においては *Tim.* に依拠してなされているという違いに対応していると思われる¹⁷。論述の具体的な内容的を見ると、IV 7 (2)は、感性的なものと知性的なものとの二分法的区別を立てる立場から、魂を物体、調和、あるいは肉体のエンテレケイアと見なすそれぞれの説の批判を行い、それらを通じて魂の不死説を擁護し主張する議論であるが、IV 2 (4)は *Tim.35a* の解釈に基づいて、分割可能性という基準によって区別される存在者の位階秩序の内に魂を位置づけることになっている。この時魂は、感性的なものか、知性的なものかの二分法ではなく、分割可能なものか分割不可能なものかの二分法において、その間の中間者とされ、しかもさらに、もう一つの間者として差異化されて語られるのである。以下で我々は先ずIV 2 (4)における魂の規定を一通り確認することにしよう¹⁸。

まず、分割可能性を基準とした4つのものの区別が語られる。

①まず、物体の本性が語られる。「分割可能で自らの本性によって分散するものども (τὰ μεριστὰ καὶ τῆ αὐτῶν φύσει σκεδαστά)」であり、「いかなる部分も、他の部分とも、全体とも同一でない (οὐδὲν ταῦτὸν οὔτε ἄλλω μέρει οὔτε ὅλῳ)」ものである。この「分割可能」の根拠はそれらが「感覚的な大きさであり塊 (τὰ αἰσθητὰ μεγέθη καὶ ὄγκοι)」であることにある。

②①に対して、知性の本性が、「第1に分割不可能なもの (πρώτως

ἀμερίστος)」として語られる。

③次に、①と②の中間に位置づけられるものとして、「物体の領域で分割可能なもの (μεριστή γιγνομένη (sc. φύσις) ἐν τοῖς σώμασιν)」が語られる。それは、色や質などの物体内の形相 (εἶδος) であるとされる。

④魂の本性は②と③の間に位置づけられるものとして語られる。かくして、「分割不可能かつ分割可能」という両義の規定が、宇宙論における中間者としての魂の本質となる。ただし、このとき「中間」は③における「中間」と同じ意味ではなく、「かの完全に分割不可能なもの近くに、かのものから生じてかものにつづく別の有 (πρὸς ἐκείνη τῇ ἀμερίστῳ πάντῃ φύσει ἄλλη ἐξῆς οὐσία ἀπ' ἐκείνης οὐσα)」という、知性を起点としてみた位置関係の下に語られるのである。

魂は一旦かかる中間者として位置づけられるのであるが、さらに、もう一つの間接者である物体内形相との区別がなされる。区別のポイントになるのは、両者における「分割可能」の意味の違いである。物体内の形相は、本性上分割可能である物体に備わるときにも一つのものとして備わる¹⁹が、物体に備わることによって部分に分けられるために、それぞれの部分はもはや同一の経験をすることがないゆえに互いに異なるもの同士であり、多となっている²⁰。従って物体内の形相も、結局は「完全に分割可能 (πάντῃ μεριστόν)」であるとされる。

これに対して、魂の「分割可能」は限定された「分割可能」である。以下で、本文を見ていくことにしよう。

「これに対して、分割不可能なもの近くにあるために (προσχωροῦσαν)」、上述のものの上位にあると我々が言っているところのものは、有でありながら、なおかつ諸物体の中へと生ずるのであり、諸物体の領域ではこの有にも分割されるということが起こるのであるが、諸物体に自己を与えるより以前

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.35a* の位置—

には分割を受けることはないのである。実に、この有が諸物体の中に生ずるときには、たとえあらゆる方向へ広がる最も大きな物体の中に生ずるのであろうと、一つであることを放棄しないままで、その物体の全体に自らを与えるのである。

この有は、物体が一であるのと同じ意味で一なのではない。なぜなら物体は連続によって一つであるが、その諸部分のそれぞれはお互いに異なるものであり、それぞれが異なる場所にあるからである。他方でまた、質が一つであるのと同じ意味で一つなのでもない。同時に分割可能かつ分割不可能なもの、それが魂であると我々は主張するのだが、それは、別々の部分を持ちながら連続が一つであるような仕方でも分割可能かつ分割不可能なものではなく、それが備わるものの全部分に備わるから分割可能であるが、全ての物体の中に全体として内在し、かつ物体のどの部分においても全体として内在するから分割不可能なのである。

そしてこのことを観る者は、魂の大きさとその力を観て、魂というものがいかに神的で驚嘆すべきものであるかを、そして魂が諸事物を超えるものどもに属していることを知るであろう。ただ魂は大きさを持たずにありながら、あらゆる大きさと共にあり、しかも、ここにありながらまたあそこにも、別の部分によってではなく、同じものによってあるのである。従って、魂自身は分割されていながらなお分割されないことになる。否、むしろ、魂自身は分割されてもいないし、分割されたものになってしまうことにもない。なぜなら、魂は自分自身と共に全体であり続けているからであり、物体の領域では分割されているが、それは諸物体が自己固有の分割可能なものの故に魂を分割しない仕方では受け取ることが出来ないためなのである。かくして、分割とは、諸物体が被ることであって、魂が被ることではないのである」(IV 2 (4), 1, 11-76)。

物体内の形相が結局のところ端的に「分割可能」とされていたのに対して、きわめて限定された意味での魂の「分割可能」が語られている。魂は「物体に宿り、諸物体の領域では分割可能」であるが、「一つであることを放棄しないままで、その物体の全体に自らを与える」のである。「魂自身は分割されていながらなお分割されないことになる。否、むしろ、魂自身は分割されてもいないし、分割されたものになってしまうかもしれないことになる」。さらに、「分割とは、諸物体が被ることであって、魂が被ることではないのである」として、魂が神的性質のものであることが強調されるのである。

以上に見たように、IV 2 (4)にいたっては、知性的／感性的、ないし、非物体／物体の二分法による説明にとどまらず、宇宙論的視点からきわめて図式的かつ明確な仕方では魂を位置づけ、それによって魂のいっそう根本的な本質規定が提示されることになっていると言えるだろう。このIV 2 (4)の魂の規定が根本的なものであることは、また、著作全体から見てもある程度言えると思われる。実際、執筆年代中最初期に書かれたIV 2 (4)は初めて *Tim.35a* に言及した論文であるが、以下に見るように、これ以降の論文において最後から二番目の論文にいたるまでこの本質規定が語られているのである。この魂の本質規定の根本的性格が説明上の汎用性をもたらししていると考えられるのである。我々は、次に、*Tim.35a* への他の言及テキストの検討を通じてこの本質規定の汎用性の内実を確かめていくことにする。

2) 魂論における *Tim.35a* への言及テキストの検討

先ず、最初に確認しておきたいのは、IV 2 (4)「魂の本質について」において明確にされた魂の本質規定、すなわち、「分割不可能」且つ「分割可能」という両義性に関する言及は『エネアデス』においてはかなり多いと言えよう。それらの事実、IV 2 (4)「魂の本質について」論文が、根本的な (*Tim.* 解釈論文としての) 価値を有していることを示していると言うことができる。そ

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.35a* の位置—

れら、魂の両義的規定は、IV 2 (4) 以外には I 1 (53), 8, 10-12, III 3 (48), 1, 34-37, III 4 (15), 6, 34-35, III 9 (13), 1, 34-37, IV 1 (21), 10-15, IV 3 (27), 4, 15; 19, 1-8, 28-31, IV 9 (8), 2, 26-28, VI 4 (22), 1, 2-3; 4, 27, VI 7 (38), 13, 20-21 などに見られるが、これらについて概観しておきたい。

I 1 (53), 8, 10-12 においては、「真の人間」が問われている。それによれば、まず「我々（即ち、個々人の魂）」の「真の人間」（魂の上位の部分）は肉体と混じり合わずに「思惟の活動」として、「生命あるもの」に君臨し、下位の部分が肉体と混じり合って生命あるものをつくる。そのような「我々」は知性的なものや真実在を超えるものも所有しているし、さらにそれを超える神（一者）も所有している。つまり、神から数えて「三番目」が「我々」であり、それは「分割不可能」な魂と「分割可能」な魂から成っている。後者は、感性界へ自己の影像を照射することで生きものを作る。しかし前者こそ「真の我々」であり、感性界の劣悪な事柄から自由である。その上で議論は「分割可能」の意味の内実へと進み、プロティノスは、「魂が肉体の大きさに自らを与える」「魂と肉体から生命あるものを作る」という説明を、「自己自身はとどまっていながら、自分の影像を肉体に与えて生命あるものを作るので、魂自身が肉体に現在しているように見える」と言い直して、「魂の分割可能」の成立要件を一層厳密にする。このように、魂の「分割可能」が本来的ではないということはすでにIV 2 (4) で言われていたことであり、この箇所もまたは、IV 2 (4) 「魂の本質について」論文と同一歩調をとるものであるということを指摘することができる。

III 4 (15), 6, 34-35 においては、「諸物体の領域に生じる分割可能な部分」について、「大きさにおいて分割されるのではない」ということが語られ、魂の同一性の側面が強調されている。まず、魂（植物的、動物の、人間）にとっての守護霊とは何であるかが問われる中で、感性界の外（知性界）に住む魂

が問われることとなり、そのような魂とは守護霊的なものや誕生の定めを超えて、可視界のすべてを超えるとされるに至る。なぜなら、魂の中の、誕生を愛する本性 (οὐσία) も魂と一緒にかしこに引き上げられているからである。もし、その本性について「それは『諸物体の領域に生じる分割可能な魂』であり、自己自身を諸物体と共に多様化し分割する魂である」と言うとしても正しい。が、しかし魂は大きさに於いて分割されるのではないのである。なぜなら、魂はいたるところで同じものであり一つであるからである。この論述において、論題は守護霊であるが、魂の本質規定に触れる段になると、表現としての「分割可能」は、表現としては条件付きで認められながらも、本質規定としては「分割不可能」に相当する「同一」「全体」「一性」が言明される以上、Ⅳ 2 (4)「魂の本質について」論文の基本的論点を共有するものであることは明らかであろう。

Ⅲ 9 (13), 1, 34-37 は、*Tim.*39e7-9 の解釈の覚え書きである。主に「知性は、『まさに生きものであるところのもの』の中にアイデアが含まれているものを見る」についてであり、この知性は分割する者たりうるとされる。なぜなら「部分に分けられたもの」(=魂)は知性に由来するからである。しかし他方で知性は決して分割者たりえない。知性それ自体は「分割不可能」なものとしてとどまるので、多くの魂に分割したのは魂(知性界の魂)であるからである。この根拠として、プラトンもまた、分割は第三のもののものであり、第三の圏内に属するとしている点が指摘される。なぜなら、その第三のものが「考える」ということをしたからである。つまり、思考は、知性の働きではなく、「分割されたもの」のなかにおいて分割された活動を営む魂の働きなのであると述べている点が指摘される。

この文脈では、「分割」の原因が魂にあり、この魂の「第三のもの」という位置関係が明確にされていると考えられる。このとき、魂の「分割不可能」についての論述が希薄ではあるが、しかし、知性の分割可能性の問題を、知

性のそれとしては否定し、魂のそれへと、問うべき問題の場を移すことがこの箇所的主要目的であるならば、知性と比較する仕方でも登場する魂に対して「分割可能」の論点が強調されるのも当然であろう。そもそも IV 2 (4)「魂の本質について」論文は、知性と魂を比較するのみならず、感性界や物体内形相と比較する中で、魂の「分割可能」と、本来的な「分割不可能」が論究されたのであった。この点を鑑みると、本論文における魂論の本質規定は IV 2 (4)「魂の本質について」論文と協調的な側面が確かにあると見る事が出来る。

IV 1 (21), 10-15 においては、IV 2 (4)「魂の本質について」論文と共有する論点が多いことが明らかである。それは、魂の両義的な本質規定である「分割可能」と「分割不可能」の概念を中心に据えて論じているからである。すなわち、魂の「分割」とはあの世からの離脱であり、肉体の中に生じることである。従って「分割可能」な魂は「諸物体の領域に」と言われるのも「もともとである」とされる。しかし、魂が「分割不可能な存在」と言われるのは、魂の「全体が離脱するのではなく、そのある部分が—もともとそれは分割されないようになっているが—（この世界に）やっぴこないからである」と述べられている。

IV 3 (27), 4, 15; 19, 1-8. 28-31 も上記の箇所と同一歩調のものである。主要な論点を拾えば以下ようになる。先ず、全体と部分の関係を、宇宙の魂と我々の魂との関係に当てはめた場合の難点を指摘し、すべての魂は一つの魂から生じると考えるほかないとする。また魂は「諸物体の領域では分割されうる」とされている以上（知性の場合と違って）「魂は全体として一つのものである」という説との調停について疑問が生じることを指摘し、解決策として、知性界に留まる「一つのもの」としての魂に、起源としての一性を見ることで魂は一つであるとする。更に、IV 2 (4)「魂の本質について」論文においてすでに述べられた、魂の「分割可能」部分と「分割不可能」な部分は混ぜ合わされて同一の場を占めるのかどうかという問題の検討がなされる。これについ

てプロティノスは、プラトンは「分割不可能」を制約無しに語るのであるが、「分割可能」についてはそうではないことを指摘し、従って魂は「物体の領域では」分割可能なものとなるのであり、最初から分割可能なわけではなかったとする。ここから論述は、魂の「分割可能」な部分と「分割不可能」な部分はそれぞれ異なった部分でありつつ混ぜ合わされて一つとなっているのではなく、その全体はそれぞれがいずれも純粹さを保ち、異なった力を持つ部分としての諸部分からなる全体であるという主張へと展開するのである。この論述において提示された点、すなわち、魂については、最初から「分割可能」なものではないし、魂が分割可能とされるのも「物体」や「生」に関わる限りであるという条件がついていることなどは、IV 2 (4)「魂の本質について」論文における魂の本質規定と一致する重要な論点であると言ってよいと思われる。

IV 9 (8), 2, 26-28 については、この論文につけられた呼び名²¹からも明らかであるが、基本的には魂の本質規定としての両義的な側面を根底にして論述を進め魂の一性を主張していることが明白である。つまり、「我々は多には絶対に与らないという意味で我々の魂は一つであると言っているのではなく—こういうことは我々の魂よりも優れたもの (φύσις) にのみ許されるのだから—、我々の魂は一つであり、かつ多でもあるのであって、諸物体の領域に生じる分割可能な有を分有する (から多である) と共に、他方では、分割不可能なる有を分有する。だから我々の魂は一つでもある」と述べられるのである。

VI 4 (22), 1, 2-3 においては、魂の万有への偏在の仕方が問題となっているが、議論の内容は実質上、IV 2 (4)「魂の本質について」論文の主要な論点の繰り返しと確認である。問われている問題は、魂が宇宙万有に遍在しているのは、魂が分割可能なものであって、宇宙の肉体が魂の分割された部分の遍在を許すほどの大きさをもつのかどうか、魂はそれ自身で遍在するのかどうか、魂は大きさを持つのかどうか、であるが、これらの問いは、魂の一性、つまり分割不可能であることを論点として含むものであると言ってよいであろう。

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.*35a の位置—

VI 4 (22), 4, 27 は、上記の箇所²¹の延長線上の議論であるが、知性と魂が並行して論じられる仕方²²で分割に関する両義性が論じられている。すなわち、知性は「異」によって多なのであり、「場所」によって多なのではない。そのすべてが一挙にある。魂もそうである。「魂の諸物体に関わる分割可能な部分も、その本性においては分割不可能である」。この魂の部分は、諸物体のあらゆる部分に魂という自然原理が映し出される場合に、諸部分に分けられたものとしてあることになるのであって、そのような限定された意味において、諸物体に関わるその自然原理は分割可能なのである。そしてさらに、自然原理としての魂は物体の諸部分と相伴²³なって分けられているのではなくて、全体としていたるところにある、という事実が、その自然原理としての魂が一つであり、本来的に分割不可能であることを明らかにしていることが述べられるのである。

VI 7 (38), 13, 20-21 においては、*Tim.* におけるデミウルゴスの世界創造における諸問題が扱われている。例えば「神の推論」の意味は何か、人間のアイデアにも感覚器官があるかどうか、知性の動きはどれほど多様であるのか、である。世界創造の動的過程については知性の動きへの言及が中心となるが、その動きが生命になるところに現れているように、「同」と「異」に従う知性の活動があり、知性はとどまり（同）ながら前進し他者（異）となった。こうして知性は「とどまり」と「他者」とで「二」となった。もしこれ（他者）が第一の者と同であるなら、前進しなかったことになるが、もし異であるなら、差異性をもって前進したのであるとされ、されに「同」と「異」の両方から成る「第三の一つのもの」を作り出す過程が語られる。この論述にある「同」と「異」の議論が知性論²⁴であって、直接魂には触れていないにしても、この箇所では世界創造の文脈の中で「異」としての差異性が下位の者を生み出す創造の根拠となっており、その創造において、「前進」という差異性の運動と「生」の成立とが一体となっていることこそ、魂の本質規定としての両義性の論述の理論的な基礎になる可能性を持つと指摘することが十分可能であろう²⁵。

以上、魂論の重要な箇所を中心に概観してきたが、IV 2 (4)「魂の本質について」論文における「分割可能」と「分割不可能」という両義の本質規定は、およそ魂論全体に亘って、明示的にも暗示的にも、規定として行き渡っていると見なすことはかなりの程度可能であると見込まれるのである。重要なのは、両義的視点と共に、魂の本来の一体性・一性の視点も共に現れる点である。それは、魂の本質の両義性というものが、一方では双価値的な意味で両義性を両義性のままに保っているが、しかし、他方では本来的な価値を保つという一義的且つ原理的な側面もあるということである。このことを、IV 2 (4) 論文は明らかにしているのである。

結論

我々は先ず第1節において、*Tim.* への言及箇所への全体的傾向性を検討した。そこから、次のことが明らかになった。第1には、プロティノスは *Tim.* の宇宙開闢説としての性格を生成運動の過程として受け止めているということである。すなわち、彼は、知性から素材までの生成秩序をスタティックに語ると同時に、何者かが何者かを生む、という創造的運動のダイナミックなプロセスをも語っているのである。第2に、*Tim.* における神話的・物語的・時系列的な記述を、プロティノスは、優劣・上下・前後・内外といった非物語的で端的な図式的関係概念を通じて、形而上学的体系性において解釈しているという点である。

第2節においては、上記のプロティノスの *Tim.* 解釈の仕方が、特に魂論において明確に展開されている点を明らかにした。IV 2 (4) において「魂の本質」をめぐる語られる垂直的体系性は、魂論の全体に渡って中核的役割を果たすと同時に、理論的汎用性をも備えているのである²³。

註

¹ ポルフィリオスは「彼の著作の中には、ストア派の教説もペリパトス派のそれも目立たない形で混入している。また、アリストテレスの著書『形而上学』もその中に圧縮されている。」と証言している cf. *Vita Plotini* 14。実際『エネアデス』には「形相と素材」、「現実態と可能態」、「自己思惟する神」などのアリストテレスに由来する概念や、あるいはストア派の「形成原理（ロゴス）」、「世界靈魂」などの概念を始め、他にも、中期プラトン主義者、ペリパトス派、新ピュタゴラス学派など、先行の哲学説からの様々な影響が見出される。これらの思想のプロティノスにおける受容及び変容を扱う研究は少なくないが、ここでは一例として *Les Sources de Plotin, Entretien de la fondation Hardot*, Geneva, 1960, P. Merlan や *From Platonism to Neoplatonism*, Martinus Nijhoff, 1975 を挙げておく。

² 消極的な面を見れば、「新プラトン主義」という呼び名は19世紀に定着した造語であり、しかも、「新」で何を意味していたのかは明らかでない。この呼び名がつけられた経緯と、当時の命名の意図を離れて、「新プラトン主義」と呼びうる思想の独自性が何であるかについての考察は、新プラトン主義協会（編）、水地宗明（監修）『ネオプラトニカ 新プラトン主義の影響史』昭和堂、1998年、「第一章 新プラトン主義とは何か」p.20～33を参照。

³ 『エネアデス』におけるプラトンの著作への言及の仕方やプラトンへの評価は、プラトンが先行哲学者の中で特別の位置づけにあることを示している。その他、ロンギノスが与えたプロティノスの評価（「彼は、ピタゴラス哲学とプラトン哲学の原理と彼に思えた限りのものを、彼以前の人たちよりも、一層明確に解釈した」Porphyrus, *Vita Plotini* 20, また、21も参照）やまた、ソクラテスとプラトンの命日のお祭りをしていたことや、プラトノポリス建国を企画したことなどの評伝も歴史的傍証としてあげられるだろう。『プロティノス全集』中央公論社、1986-8 第一巻、水地宗明「プロティノス入門 プロティノスの哲学」（特に p.57～59）参照。

⁴ 「従って、プラトンは、善から知性が出、知性から魂が出ていることを知っていたのである。また実際、我々がここで述べていることは別に新しいことではなく、今でなく、昔すでははっきりとした仕方ではなく言われたことなのである。そこで、今ここで説かれている言論が、その解説として出てきたわけなのであるが、これらの言論の思想そのものが昔からあったということに関しては、プラトン自身の書物が証拠となって、我々の説くところに保証を与えてくれるのである」（V 1, 8, 9-14）。

プロティノスの時代、哲学的営みの現場で実際に行われていたのは、プラトン、

アリストテレスを始めとする古典の解釈であり、従って、様々なテキスト間の調停を行うことにもなっていた (cf. P. Hadot, *Plotin ou la simplicité du regard*, 3ème édition, Études Augustiniennes, 1989, p.12. このことはポルフィリオスが伝えるプロティノスの授業風景からも伺うことができる。cf. Porphyrius *op. cit.*)。上記引用にあるように、さまざまな過去の哲学者の言葉の中で、プロティノスには、プラトンの言葉こそ自説の最大の保証であるとして特別の地位を与えているのである。また、IV 8 (6), 1, 11-26 も参照。

⁵ 拙稿「『魂が肉体に備わる』とは何か」西洋古典研究会論集第10号、西洋古典研究会、2001年、及び「プロティノスにおける魂の非受動性について」人文科学論集第10号、学習院大学人文科学研究科、2001年参照。

⁶ 『エネアデス』における『ティマイオス』の言及回数は、プラトン著作中最多であるという量の根拠をさしあたり挙げたい。この論考において、重要性の実質的な内容を出来る限り明らかにする。

⁷ 以下、『ティマイオス』を *Tim.* と略記する。『エネアデス』の行数はプロティノスによる *Tim.* 言及箇所を示す。なお、『ティマイオス』における世界創造と世界構成の存在論的意味に関する解釈史としては以下を参照した。cf. L. Brisson, *Le Même et l'Autre dans la structure ontologique du Timée de Platon*, Academia Verlag GmbH, 1994.

⁸ P. Henry et H.-R. Schwyzer, *Plotini Opera* 3vols, Oxford: Clarendon Press, 1964-1982。本稿ではこれを引用テキストとして使用する。『ティマイオス』引用箇所のインデックスは、vol.3 p.348-364 を参照。

⁹ 『プロティノス全集』、第一巻、59頁を参照。

¹⁰ その他、VI 7 (38), 8, 36. VI 6 (34), 7, 16-17: 15, 8-9: 17, 39.

¹¹ 「直知対象は知性の外には存在しない」とするプロティノスの説 (cf. V5 (32)) がアリストテレスの「自己思惟する知性」に由来するとすれば、プラトンをアリストテレス的に解釈していることになる。この影響関係についてはアームストロングの論考を参照。cf. A. H. Armstrong, The background of the doctrine “That the Intelligibles are not outside the Intellect”, *Les Sources de Plotin*, p.393-413. また、Blumenthal は、『パルメニデス』132c に対するプロティノスの立場（「知性は自己を知っていなくてはならない」cf. V 5 (32), 1, 3-6）もまた、プロティノスの重要な出発点の一つとなっていることを指摘している。cf. H. J. Blumenthal, *Platonism in late antiquity, Soul and Intellect*, Variorum, 1993, p. 1-27 (特に p. 7-8).

プロティノスの『ティマイオス』解釈—魂論における *Tim.*35a の位置—

¹² καὶ ὁ μὲν δὴ ἅπαντα ταῦτα διατάξας ἔμενεν ἐν τῷ ἑαυτοῦ κατὰ τρόπον ἦθει.

¹³ μένοντος μὲν αἰεὶ τοῦ προτέρου ἐν τῇ οἰκείᾳ ἔδρᾳ, τοῦ δὲ μετ' αὐτὸ οἶον γεννωμένου ἐκ δυναμέως ἀφάτου.

¹⁴ これらの他、II 2 (14), 3, IV 4 (28), 22, V 1 (10), 2 などの箇所において、魂の宇宙への備り方と支配の仕方に関する論述がある。

¹⁵ 「素材に入り込んだり抜け出たりするもの」を、物体の中の形相もしくは自然(φύσις) と解する。

¹⁶ この行は、Armstrong などの読み方に従い、このような意味に理解した。Bréhier, Fleet のような読み方を取らない。cf. A. H. Armstrong, *Plotinus, text with translation*, vol. 3, Harvard University Press (The Loeb Classical Library), 1984, p.243. É. Bréhier, *Plotin, Ennéades*, text établi et traduit, vol. III, Les Belles Lettres, 1956, p.105. B. Fleet, *Plotinus Ennead III. 6, On the impassivity of the Bodiless*, Clarendon Press, 1995, p.176.

¹⁷ cf. É. Bréhier, *op. cit.* p.5. J. Igal, *Plotino Enéadas III - V*, introducciones, traducciones y notas, Editorial Gredos, 1985, p.281.

¹⁸ ここでは大きな流れのみを見ていく。この箇所を含めたIV 2 (4) の詳細な読みは、2007年度新プラトン主義協会大会(於神戸市外国語大学)のコロキウム発表にて試みた。この発表に基づく論文は『新プラトン主義研究第8号』新プラトン主義協会、2008年に掲載予定である。

¹⁹ IV 7 (2), 8¹ では、物体が部分に切断されても質が同一性を保つことを説明する例として、蜂蜜の甘さの例が出されている。「蜂蜜の甘さは、蜂蜜のそれぞれの部分に(全体の甘さ・または他の部分と)等しい甘さとしてあるのである」。しかし、例えば可視的な形の場合にはどう考えたらいいのであろうか。

²⁰ 具体的にどのような例を考えればよいであろうか。先の蜂蜜で考えるならば、蜂蜜はどの部分をとっても蜂蜜という質の点で一である。しかし、蜂蜜のこの部分(ex. ジャーの中の蜂蜜)とあの部分(ex. スプーンで掬った蜂蜜)の甘さは、一方の甘さが口に入って消えても他方の甘さはその影響を受けない、ということであろうか。

²¹ 「すべての魂は一体をなしているか」。

²² この論文に於いては、そのことが「同」と「異」の論点を根底に据えているこ

との可能性を示唆していると見ることができる。実際、魂は「一つであることを放棄しないままで、その物体の全体に自らを与える」ことによって、両義性が成り立つのだから、そこにも「同」と「異」の関係があるとすることができるのである。知性と魂の二つの議論は、もちろん、別々の議論ではあるが、アナログカルであるとはできよう。しかし、知性を議論する場合には「同」と「異」という表現ではあったが、魂が登場する場合は「分割不可能」と「分割可能」という言説が現れている点も、特徴的な事実として見逃すことはできない。この点は、更に、探求を深める必要はあるだろう。

²³ 以上のことから、IV 2(4)の論文が、プロティノスの哲学理解にとっては魂論のみならず体系全体を見通すための理論的支柱の可能性として価値ある論文となると思われる。この論文を中心としてさらなる詳細な研究が必要と思われるが、それは今後の課題としたい。